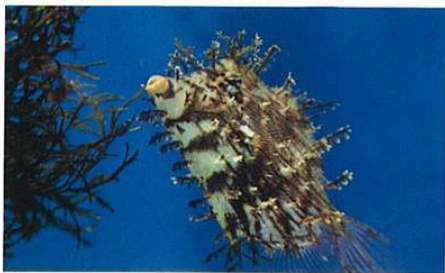
シーワールドのアニマル達

●南の海からやってきたヒゲハギ

黒潮の影響を受ける房総の海は夏から秋にかけての水温の高い季節にはチョウチョウウオの仲間やスズメダイの仲間など熱帯性の魚達を見ることができます。これらの魚の多くは日本の南の方で生まれたものが黒潮で運ばれてきたものですが、時には赤道近くの熱帯に住む魚もはるばるやって来ることがあります。昭和58年10月18日にヒゲハギというカワハギの仲間が江見でとれ、当館に搬入されました。この魚は日本では昭和44年に九州の天草からはじめて報告された種類で、その後、和歌山県や石川県などでもとれていますが、房総半島では初めての記録と思われます。

このヒゲハギをよく観察してみると、体の形や色はカワハギにそっくりですが、体側に細い縦じまがあることや、全身に100本ほどの突起物があることが特徴です。この突起物は長いもので3㎝ほどもあり、それぞれに小枝が出ていて色や形が海藻やサンゴの仲間に実によく似ています。

魚には身を守るために海藻や海底の一部に似せた擬態をしている種類がかなりありますが、その中でもヒゲハギの擬態は特に優れたものだと思います。水槽の中のヒゲハギはじっとしていて餌を入れた時以外はほとんど泳ぎまわりません。動かない方が敵に見つからないからでしょう。よほど擬態に自信があるのか手や網が体に触れても逃げようともしません。しかし目だけはキョロキョロと良く動かし、なかなかかわいい魚です。(小坂)

▲ヒゲハギ *Chaetodermis penicilligera.*

●マゼランペンギン

マゼランペンギンは、南アメリカ太平洋岸及び、大西洋岸の島々に生息しています。体長は約65㎝、体重は4～5㎏ほどの中型のペンギンで、体色や模様はフンボルトペンギンにたいへんよく似ていますが、首のところに太い黒色のラインが1本多く入っているのが特徴です。昭和58年5月からシーワールドでは、雌雄一対のマゼランペンギンを飼育することになり名前を「オコ」「トコ」と名付けました。当館へ来た時は2羽共やせていて胸の骨がはっきりと見えるほどでしたが、比較的おとなしく回りの環境に、ものおじしない性格なのか、係員がイワシを見せるとすぐに食べ始め次第に体重の増加も見られ元気になり係員を安心させました。7月にはアシカやアザラシなどが一緒に飼育されている「なかよし広場」に移し飼育を続けましたが、自分の体よりも大きなカリフォルニアアシカやオタリアが近づいても、逃げ回ることもなく、逆に自分たちから近づいて、回りをうろうろすることさえ見られました。この2羽のマゼランペンギンは、「なかよし広場」での展示効果をより一層高めて、にぎやかさをましてくれています。まだ来てから半年足らずですが、シーワールドのふん囲気にもなれ、すでに先輩カップル達にもまけないほどのアツアツカップルになっています。これからは、二世誕生に期待しながら、フンボルトペンギンやイワトビペンギンとの行動の相違について、よく観察し比較していきたいと思っています。(吉野)

▲マゼランペンギン *Spheniscus magellanicus.*

さかまた No.22　（禁無断転載）

編集・発行

〒296 千葉県鴨川市東町 1464−18
☎ 04709（2）2121

発行日 昭和58年12月

さかまた

鴨川シーワールド　NO.22

アシカの人工哺育記

「プン」が生まれたのは、6月6日のこと。母親のジュリーは、2日前より餌を食べず、なかよし広場の穴ぐらの中でうずくまっていました。「出産間近」と注意深く観察していたところ、夜8時半に無事出産が確認されました。「プン」は今までに生まれたアシカの仔に比べやや小さい感じがしましたが、とても活発で、しきりにジュリーと鳴き合い親仔であることを確認しあっていました。ジュリーの前回の仔は、乳の出が悪かったために生まれてから21日で死亡してしまいました。そこで、今回の2度目の出産である「プン」には大きな期待をよせていました。なかよし広場では、カリフォルニアアシカをはじめオタリアやアザラシなど多くの種類を一緒に飼育しているため、他の動物からじゃまをされるようなことがあってはと親仔だけを分け、おちついて授乳が出来る環境に移しました。しかし一日の授乳回数や授乳時間は、明らかに増加していましたが、授乳量はきわめて少なかったのか、「プン」の体重は、当初7.5kgあったのに、14日齢では6.7kgにまで減ってしまったのです。母親の授乳による自然な哺育が望ましいことはわかっていましたが、このままでは生命も危ぶまれるため、やむをえず人工哺乳を行うことに決めました。

▲親仔を仲良し広場から育児室へ移す。　（6日齢）
ジュリーの乳を吞むプン

人工哺乳開始　たて50cm、よこ80cm、深さ40cmのバスケットを2つ組み合わせ床にはタオルを敷いて飼育箱を作り、人間用や動物用の哺乳ビンと乳首、そして生ミルクや海産哺乳類用ミルクをそろえた後、人工哺育を試みました。ミルクを吞ませようとあの手この手と知恵をしぼり工夫をこらしてみましたが、においをかいだり乳首をくわえたりすることはあっても「おかあさんじゃない」とでも言いたげで、全く吞む気配がありません。栄養状態があまり良くないので、やむをえずしばらくは強制哺乳を行いました。「プン」はいやがって鳴きわめきましたが、身体をタオルで巻いてあばれないようにして抱き上げ、細い管を口から胃の中に通し、海産哺乳類用ミルクを与えました。

▲ようやく自分でミルクを吞むようになりました。母親代りの係員のヒザの上でミルクをもらう「プン」（23日齢）

哺乳量や、一日の哺育回数は、哺乳後の睡眠状態や鳴きの度合、体重の増減によって決めてゆきました。はじめのうちは1回の哺乳量を200～250㏄とし、一日に5回与えました。「プン」は、ミルクを飲み終ると1～2時間睡眠し、目をさました時は、しきりに鳴いて母親のジュリーを探し求めました。チャンスとばかりジュリーの体臭をつけた毛皮から哺乳ビンの乳首を出してミルクを吞ませようともしましたが、「プン」は鳴き続けるばかりで見向きもしてくれません。しかし、人工哺育を始めてから8日目に、海産哺乳類用ミルクにサバのスリ身を混ぜて眠っている「プン」の鼻先に近づけてみました。すると、クンクンとにおいをかいたあと起きあがり、動物用哺乳ビンの乳首をくわえるではありませんか。そして、乳首をくわえて口の中にたまったミルクをゴクッと吞んだのでした。口からはミルクをこぼし全身ミルクまみれになっての哺乳ですが、第一段階突破とホッとさせられました。どうやらサバのスリ身のにおいに反応したらしく、これ以後はミルクにスリ身を加えて与え続けました。しかし、こぼさずに吞め

▲「こぼさずに吞むんですよ！」

るようになるまでにはさらに約一週間がかかりました。ちょうど生まれて1ケ月目の頃です。この頃を境いに人に対しても友好的な態度を示す様になり、人が歩くとチョコチョコとついて来たり、眠くなると係員のヒザの上に乗ってまどろんだりもするようになりました。

▲哺乳の後、満足そうにまどろむ　（30日齢）

「プン」初めて泳ぐ　2年前に当館で生まれたサンディーやハックは、生まれて1週間程で初めて水に入り母親にささえられながら泳ぎを覚えましたが、「プン」にはささえてくれる母親が居ないため、まず深さ20cm程の浅いプールをつくり様子をみることにしました。生まれて20日目頃まではほとんどプールには入らず鼻先を水の中につけてブクブクと鼻から息を出して遊んでいました。しかし、日を追うごとにこのブクブク遊びは回数を増し、次第に目も水の中につけたり水の中で口を開いて遊ぶようになりました。そして、ついに生後29日目にはジャボンと全身水に入りました。ちょっと深いプールでも、はじめは頭を水の上に出してまるで平泳ぎのように泳ぎましたが、水に入って10日目には潜水も出来るようになりました。

▲初めて深いプールに入る。がんばれ「プン」（30日齢）

餌付け　母親が育てている場合には、生まれて6ケ月から1年で餌を食べる様になりますが、特別な例として2ケ月目で餌付いた例もあります。そこで「プン」の場合は、少し早いとは思いましたが、2ケ月目から小さいイワシなどを与えはじめてみました。はじめはあまり興味を示しませんでしたが、生きたイワシにはとても関心を持ち、ぐちゃぐちゃになるまで咬んであそんでいました。そして、生まれて77日目に初めて魚を呑み込んでくれました。

▲ホースから出る水にじゃれつく　（40日齢）

生まれて150日目の現在では、1日1500㏄のミルクと冷凍のイワシやサバを、0.5kg～1kg程を与えています。このごろは他のアシカ達と一緒にしてつき合い方を教えるための社会教育？も始めていますが、どんなアシカに育ってゆくのか、今からとても楽しみにしています。（毛利）

表紙説明

オウムガイは古生代カンブリア後期から中生代に繁栄したイカやタコの仲間で、「生きている化石」として有名です。現存種としては3種類が知られていますが、当館で飼育しているのは、フィリッピンで採集されたオウムガイ *Nautilus pompilius* です。（金銅）

☆☆☆☆シャチのローリングライド公開☆☆☆☆

今年の夏のシャチショーでは、シャチ乗り、ロデオ、ルーピングキックに続きシャチのダイナミックな「ローリングライド」が公開されました。「ローリングライド」というのは、回転するシャチの頭部に係員がつかまっていっしょに回るというもの。何しろ体も大きく、力もあるシャチですから私達がしがみついていてもハエがとまっているぐらいにしか感じていないようですが係員の方はもう大変‼必死でしがみついていても、あっというまにふり飛ばされてしまう事もしばしばあります。まるで遠心分離機か大きなコマにでも乗っているような感じがするローリングライドです。シャチの水中種目もレパートリーがふえ一段とみがきのかかってきたシャチ君のショーを、また見にきて下さいね‼（前田）

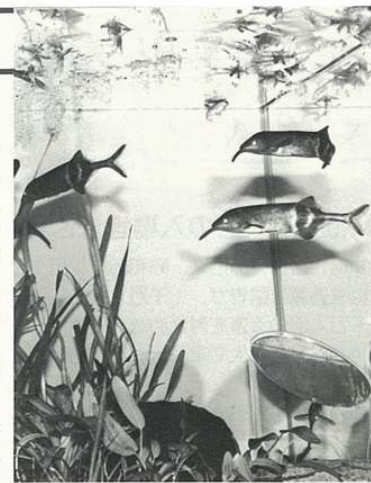
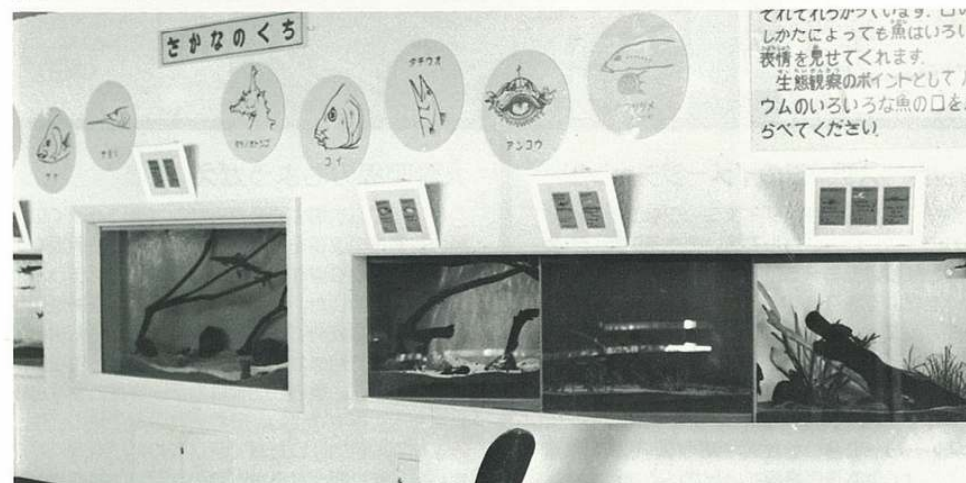
▲イルカと遊ぶ海の殺し屋シャチ君。

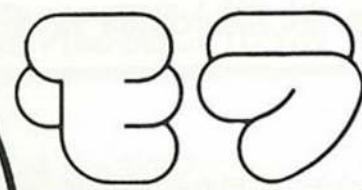
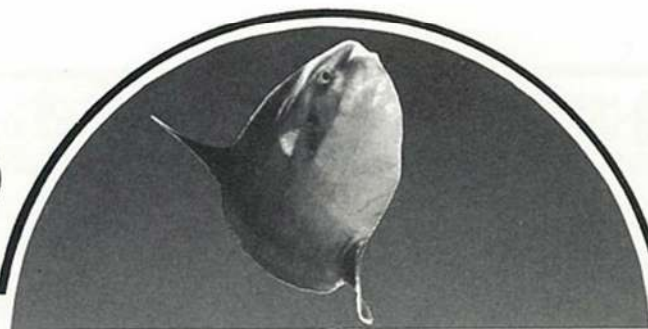
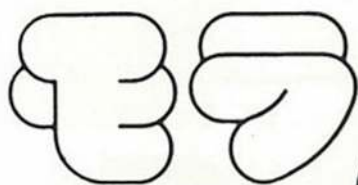
◀シャチにつかまりスタンバイOK。

コンビを組んで、いきもピッタリ▶
くるくる回り、笑いの渦の中。

●熱帯性淡水魚コーナー開設●

今年の7月から世界中の淡水魚の中から面白い口をした魚たちを集めて一つのコーナーを開設いたしました。魚の口というと皆さんはどんな形を連想されますか？よく見ると魚の口は食べ物や行動などその魚の生態によってさまざまな形をしています。魚の生態を理解するには、魚全体だけでなく魚のある部分に注目して観察するとよくわかることがあります。そこで魚の生態観察のポイントとして今回は口を中心に見ていただくことにしました。

いろいろな形の口をした世界の魚の中から体の形や色、習性などを考えて、吸盤のような口をしたプレコストマス（ナマズの仲間）、その名もずばりエレファントノーズフィッシュ、大きなヘラ状の上あごを持つヘラチョウザメ、しゃれた赤い尾びれのレッドテールキャットフィッシュなど13種類を選びこれらの魚を流木や水草でデザインした6つの水槽に展示しました。水槽に入れて見ると、大きな口であくびをしたり、ガラス面に吸いついたり、長い口で砂の中の餌を探がしまわったりして、あらためて「魚の口」を見なおさせてくれます。水槽も斜めに配置し正面だけでなく横からも観察できるよう工夫してみました。魚の中にはいっしょに飼うとけんかをしたり、人目につきにくい流木の影や水槽の上の方にばかりいたり、底の砂をひっかきまわしてしまうものなどがいて苦労もたえませんが、これからも世界のちょっと変わった魚たちをこのコーナーで御紹介していきたいと思っています。（桐畑）

▲エレファントノーズフィッシュ *Gnathonemus petersi*
この長いあごで餌を探します。

▲開設された熱帯性淡水魚コーナー。

ヘラチョウザメ *Polyodon spathula*
この口でプランクトンを食べます。▶

●1,000万人目の入場者決まる

10月10日体育の日に、昭和45年10月1日オープン以来通算入館者が、1千万人を突破しました。1千万人目の幸運を射止めた入館者は、千葉県市川市から家族4人で来館された、川島すみ子さん(35歳)です。

10時17分、川島さんが入館すると同時にクス玉が割れ、 花火が打ち上げられましたが、 係員に「1千万人目おめでとう」と声をかけられ、事情を聴いてびっくり。ただちに記念セレモニーが始まり、当社社長より「表彰状」と、「1年間入館無料パス」「シーワールドホテル5名様無料招待券」、水族館長より「シャチのミニチュアモニュメント」などの記念品が贈られ、川島さんも「鴨川シーワールドに来るのは3度目ですが、まさか1千万人目になるとは幸運でした」と大喜びでした。(村田)

●にぎやかになった干潟の生物展示水槽

昭和56年より有明海の干潟に住む生物を飼育するために、水槽の中に有明海の泥を入れて人工の干潟を作り生物の展示を続けています。水槽の中では、泥の上をはうようにして歩くムツゴロウやトビハゼの非常におもしろい生態が見られます。お客さんが水槽の中をのぞき込んだりするとヒョウキンな顔をしたトビハゼは、びっくりしてカエルのようにピョンピョン飛びはね回ってお客さんを笑わせています。

この楽しい水槽に、再び長崎水族館の好意によりたくさんの仲間が空輸されてきました。にぎやかになった干潟の生物展示水槽は一段と見ごたえのある水槽になりました。石や木の上でのんびりと休んでいる時もありますので、驚かさないようにそっと見てやって下さい。

(森田)

●ショーステージのイメージチェンジ

シーワールドでは、ダイナミックなシャチ、イルカのショー、コミカルで笑いのあるアシカショーなど楽しいショーを毎日たくさんのお客様にご覧いただいておりますが、このたびショーのイメージアップと、それなりのふん囲気づくりを高めるために夏のショーからステージのかざりつけを行ないました。シャチ、イルカのプールにはギリシャ神殿風のステージを作り、アシカのプールにはストーリーに合わせた水戸黄門の時代劇風な建物を設けてお客様に好評をいただいております。シャチやイルカ、アシカ達も一新されたステージを見てやる気十分‼これからもショーの変更のおりにはストーリーに合せたイメージをだすためステージに変化をつけていくことを計画しております。お楽しみに!(平塚)

●説明板のもようがえ

パノリウム水槽の沖合からサンゴ礁にかけての魚の説明板の改装を行ないました。特に説明板を明るく、分かりやすくして、楽しく見てもらうように工夫しました。説明板の台の高さは子供から大人まで楽な姿勢で見る事ができ、台の色も水槽別に魚がすむ沿岸から沖合、サンゴ礁へと色を変えてあります。魚の説明板はカラー写真に裏から光をあてて見やすくし、それぞれの魚の分布と住み家を赤く色つけした絵で示してわかりやすくしました。また餌となる食べ物の説明も、おむすびを持ったカニをシンボルマークとして、ゆかいなイラストで表わしてみました。水槽を泳ぐ魚達と共により一層楽しくご覧いただけるようになったことと思っています (高橋幸)